

(PDF 版・4の2のア)『教会教義学 神の言葉Ⅱ／3 聖書』「二十節 教会の中での權威—— 言葉の權威」

(文責・豊田忠義)

「二十節 教会の中での權威—— 言葉の權威」(173-224 頁)

「もしも、あなたがたは、わたし〔「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身〕の証人となるであろう……という約束が成就されないとすれば」、「また、〔もしも〕見よ、わたしは、いつもあなたがたと共にいるという約束が成就されないとすれば」、「それであるから、〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞」として現存している〕聖書が教会〔その聖書を媒介・反復した、その聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とした教会の＜客観的な＞信仰告白および教義(Credo)としての第三の形態の神の言葉である教会の宣教〕にとって神の言葉でないとするならば」、「その時には」、イエス・キリストにおける「神の啓示は単なる思い出であり、どこまでいっても単なる思い出でしかないことになるし、〔まことの〕イエス・キリストの教会は存在しないことになる」、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する「自分たちの中で、〔第二の形態の神の言葉である〕預言者と使徒たちの生と働きが引き続いて起こっており、〔それ故に第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する〕自分たちは、〔第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復することを通して、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とすることを通して、〕預言者や使徒たちと共に、神、キリスト、聖霊の直接的な、絶対的な、内容的な權威との直接的な関係の中に立っているということを行うことはできない」。何故ならば、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教においては、聖書を媒介・反復するという——すなわち、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りにおける「原理」・「規準」・「法廷」・「審判者」・「支配者」・「標準」・「基準」とするというその「＜間接性こそ＞が、主ご自身を通して設けられ、主の甦えりを通して力を奮う」し、そのような第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復したところの——すなわち、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準としたところの、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身と第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会(そのすべての成員)との媒介的・反復的な関係性こそ(「＜間接性こそ＞」、「＜間接的な関係性＞こそ」)が、「まことの直接性」、「まことの関係性」であるからである。言い換えれば、先ず以て第二の問題である神の本質を問う問いを包括した第一の問題である神の存在を問う問いを要求するイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞の中での三位一体の唯一の啓示の類比とし

での神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業（・働き・行為）であり啓示の主観的可能性として客観的に知覚的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」（＜神聖＞性・＜神的なもの＞性）の「概念の實在」（人間の言語を介した＜書物＞性・＜人間＞性）としての第二の形態の神の言葉——すなわち、自己自身である神としての「父なる名の＜内＞三位一体的特殊性」・「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、われわれのための神としての「外に向かって」の外在的なその「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉）であるイエス・キリストによって直接的に唯一回の特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」であり「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している聖書が、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学にとって神の言葉でないとするならば、「その時には神の啓示は単なる思い出であり、どこまでいっても単なる思い出でしかないことになるし」、その聖書を媒介・反復した、その聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とした「〔まことの〕イエス・キリストの教会は存在しないことになる」からである。したがって、その時には、教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学、教会の聖職者や牧師や神学者たちは、自分の人間的理性や人間的欲求やが主観的に恣意的独断的に対象化し客体化した自分の「存在者レベルでの神」・意味的世界・物語世界・神話世界を神として「錯覚している」に過ぎないことになる。言い換えれば、彼らの神は、キリストにあっての神としての神ではないということになる。すなわち、そこにおいて神は、「まさに、人間の想像能力・思惟能力・表象能力の本質が、現実化され対象化された……絶対的な本質（存在者）、……と考えられ表象されたもの以外の何物でもない」ものであるし（『フォイエエルバッハ全集第12巻』「宗教の本質にかんする講演 下」）、「（中略）神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」し、「（中略）神の啓示の内容は、〔キリストにあっての〕神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神から発生した……。（中略）こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない！』……」ものであるということになる（『キリスト教の本質』）。このことは、「一言で言えば、〔自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階にある〕カトリックの教会概念の……新プロテスタント主義的な適用と変形である」。

「それらすべては、〔キリストにあつての特別〕啓示の一回性についての大きいなる錯覚であり、〔第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復しないところの、すなわち聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準としないところの第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会と〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕啓示を汎神論的に同一視する」ところの自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階における停滞と循環である。身近なところでは、東北学院大学の神学者・佐藤司郎は、「カール・バルトのエキュメニカルな神学への道」で、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）について明確に提起しないまま、それ故にまさにその概念構成からして、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会と啓示（「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身）との関係を、直接的無媒介的な関係性の中で論じている。このことについては、（PDF版・その8）「大学神学者・佐藤司郎の『カール・バルトのエキュメニカルな神学への道』論と『カール・バルト自身の概念構成全体』との＜差異性＞」を参照されたし。

そのような訳で、**第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会が**、「先ず第一義的に優位に立つ原理」・規準・標準としての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストと共に、「教会に宣教を義務づけている」と同時に教会の宣教の思惟と語りにおける原理・規準・標準としての第二の形態の神の言葉である「**聖書の権威と自由に〔他律的服従と自律的服従との全体性において〕服従する時**」（終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、聖書を媒介・反復して、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準として、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあつての神、キリストの福音を尋ね求める時）、「**そのような仕方で人間的な証言の中で証しされた神が**〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕**教会に対し**〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による、客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」とその「啓示の出来事」の中での主観的側面であるキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいて〕**現臨される時**」、そしてその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している「**聖書が**〔「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の〕**神の言葉である時**」、キリストにあつての「**神の啓示によって生きるであろう**〔起源的な第一の形態の神の言葉としての「啓示ないし和解の实在」そのものであるイエス・キリストによって生きるであろう〕」。その時には、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会は、「傲慢と絶望のいずれに陥ることもなく、むしろその真中を貫き通って進むであろう」、「実際にキリストの貧しさの中で、しかしまた実際にキリストの栄光の中で、決してわざとらしく自分勝手に選んだ晴着あるいは乞食の着物を身につけてではなく、実際に、正当な仕方、われわれの現在の中でキリストの現臨を経験し宣べ伝え

つつ、われわれの時間の中で〔「イエス・キリストにおける啓示の時間」から「攻撃された」、「否定された」、「非本来的な」われわれ人間の中で〕、キリストの時間〔「キリスト復活四〇日（使徒行伝一・三）」、「キリスト復活四〇日の福音」、「実在の成就された時間」、「まことの過去」と「まことの未来」を包括した「まことの現在」に包括されたところの「イエス・キリストにおける啓示の時間」〕の同時代人であるであろう。したがって、その出来事の生起に関して、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会は、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の実在」としての第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している「聖書にのみ帰し、そのほか誰にも、また自分自身に対しても、帰そうとしない決心をするか、あるいはその反対の決心をするか、繰り返しひとつを選ばなければならない……」。

そこで、「われわれは（中略）十六世紀の宗教改革および対抗改革の中で公然と表面化し、それ以来深刻な抗争のひとつに直面することになる」。「その際、**福音主義教会にとって最も身近な、最も圧迫して来る敵対者**」は、**対外的に現存する「カトリック主義ではなく」、カトリック主義と通底している「主な点では全くただ誤れる教皇教会の広げられた腕〔カトリック主義の適用と変形〕として自分を示した**」、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の実在」としての第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復しないところの、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準としないところの、それ故に**第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学を、起源的な第一形態の神の言葉である「啓示〔「啓示ないし和解の実在」そのものであるイエス・キリスト自身〕と等置する**」、「啓示と同一視する」ところの、**対内的に現存する「敵対者、新プロテスタント主義……の異端である**〔われわれ人間の自由な内面の無限性、人間的理性や人間的欲求やによって主観的に恣意的独断的に対象化され客体化された「存在者レベルでの神」・「存在者レベルでの神の啓示」・「存在者レベルでの神への信仰」、その人間の意味的世界・物語世界・神話世界の自己表現を目指す**自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階で停滞と循環を繰り返す異端である**。ルドルフ・ブルトマン、モルトマン、R・ボーレン、エーバーハルト・ユンゲル、ベルトルート・クラッパート、パンネンベルク、滝沢克己、八木誠一、北森嘉蔵等、「われわれは、シュライエルマッハー以外の他の人々の所でも、……〔「人間の自己運動を神のそれと取り違えるという混淆」、「神の自由を認識していない事態」のただ中にある〕ヘーゲルの強力な痕跡に遭遇するであろう」（『ヘーゲル』）〕」。「新プロテスタント主義」は、「聖書の中に証しされている啓示の一回性」、「独一無比性と神性」を認識し信仰し承認し確認するのではなく、キリストにあつての特別「啓示」（起源的な第一の形態の神の言葉としての「啓示ないし和解の実在」そのものであるイエス・キリスト自身）と第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会的な実在」、「歴史」、「そもそも人間

的な実在」と「等置」し、「同一視」して、それ故に「啓示を、教会的な実在に、歴史に、そもそも人間的な実在に」拡散させたのである、「キリストの永遠のまことの神性の告白を信用しない」で、また「神であり給う言葉が人間となったのであり、決して神性それ自体が人間となったのではない〔その内在的本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方における言葉が人間となった「真に罪なき、従順なお方」〕」イエス・キリストを、「下からの半神」に、また「半神・半人」に、また「超人」に、人間の「最深の本質」に、人間の「最高の理想」等々に、すなわち単なる「空虚な概念でしかないものにしてしまった」のである。大学神学者の八木誠一は、聖書を媒介・反復するという仕方ではなく、それ故に主観的に恣意的独断的にイエス・キリストを「ただの人」として規定することによって、まことの神にしてまことの人間「真に罪なき、従順なお方」イエス・キリストを、われわれ人間の内面の普遍性に届く言葉であるヨハネ8・1以下からして实际的に事実に不信仰・無神性・真実の罪のただ中にある「罪と汚れに満ちた」われわれ「ただの人の真実のあり方を告げた」人に、すなわち単なる「空虚な概念でしかないものにしてしまった」。そのような「何らかの抽象を以て始められ何らかの空論に終わるところの」「すべての大学社会の神学」者で自然神学（混合神学、人間学的神学、哲学的神学）を目指している（『ルートヴィッヒ・フォイエルバッハ』）八木は、もともと啓示信仰・啓示認識を求めているのではないことを吉本隆明は見抜いて、次のように述べている——吉本は、八木に対して、「信仰することによって信仰していない者には見えない何か新しい地平線が見えると思うけれども、……そこをうまく開陳してみてくださいませんか」と尋ねたことに対して、八木は、「かつての自分には見えなかったものが見えてきたことが二つある」として、第一に、それは、「観念的なものに重点を置いて、そっちが真実だと思っていた」が、それは「ほんとは虚しいものなんだ」ということである（おそらくこのことは、八木が観念のリアリティの獲得の問題を、科学主義的にか歴史主義的にかその実証可能性においていることを意味しているに違いない）、また第二に、「エゴイズムに依拠して自分を確かめて自分を知り、たしかめ、また立てようとしていたことが明らかになった」ということである（このことはおそらく、人は不可避免的に企投性としての人間の個と現存性——被企投性としての類と歴史性との交点で生きることが認識し自覚したことを意味しているに違いない）、と述べている。この答え方に対して、吉本は、「だけど今の八木さんの説明では、……あらゆる認識が、もし自分自身の体験、それから自分自身の資質というか、そういうものを全部根こそぎ動員して、認識と言うものを追究していくと出てくる〔人間学的領域の〕問題と、あまり違わない」と疑義を呈し、「それ宗教〔キリスト教信仰〕と関係あるかな、ということですね。やはり納得できるように思いません」と述べている（『現代思想11 一九七五年』「＜新約思想をどうとらえるか＞吉本隆明／八木誠一」）。八木は、聖書を媒

介・反復して思惟し語っていないのである、人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍に依拠した「単なる知識」を語っているのである。

バルトは、次のように述べている——「哲学、歴史学、心理学等は、この神学的問題領域のどれにおいても、事実上、教会の自己疎外の増大以外のなにものにも役立ちはしなかった」、「神についての教会の語りの墮落と荒廃以外の何ものにも役立ちはしなかった」。その時には、「哲学は哲学であることをやめ、歴史学は歴史学であることをやめる」、「キリスト教哲学は、それが哲学であったなら、それはキリスト教的ではなかった。また、それがキリスト教的であったなら、それは哲学ではなかった」。何故ならば、「われわれが哲学的用語をつかうという事実にもかかわらず、神学は哲学的試みが終わるところから始まる」し、神学も理性的な知的営為ではあるが、教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学は、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づかなければならず、「神学は方法論的には、ほかの学問のもとで何も学ぶことはない」からである（『バルトとの対話』等）。

それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）から言えば、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とするところの第三の形態の神の言葉である「教会は、宗教改革的な聖書原理の論争的な尖鋭化を、無条件的に拒否することはできない」。先ず以て、キリストにあっての特別「啓示の第一の認識源泉である書カレタ書物」（第二の形態の神の言葉である聖書、「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している「啓示の源泉としての聖書」）との関係において、第三の形態の神の言葉である教会の「書カレテイナイ伝承」、「教會的な伝承」は、あくまでも聖書を媒介・反復した、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とした「啓示の第二の認識源泉として秩序づけられている」——すなわち、「啓示の第二の認識源泉」としての第三の形態の神の言葉である「教会の書カレテイナイ伝承」、「教會的な伝承」は、起源的な第一の形態の神の言葉である「キリスト自身の口カラ受け継ぎ、……聖霊ノ靈感ニヨッテ、〔第二の形態の神の言葉である〕使徒タチカラ、〔第三の形態の神の言葉である〕ワレワレ教会ニ伝エラレタモノ……」である。この「啓示の第一の認識源泉としての聖書」またその聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である「啓示の第二の認識源泉としての教会の宣教」において神は、イエス・キリストの父、子としてのイエス・キリスト自身、神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊であり、このような三位一体の神として自己啓示する、それ故にこの「啓示が教会の宣教の＜客観的な＞

信仰告白および教義（Credo）である三位一体論の根拠である」という事柄を、第三の形態の神の言葉である教会（聖職者、牧師、神学者、すべての成員）は、「拒否することはできない」。したがって、この「三位一体論」は、「神論の決定的に重要な構成要素であり、啓示の認識原理である」。したがってまた、「教会の宣教の批判と訂正」は、「常に、この三位一体論に即して行わなければならない」。何故ならば、この「三位一体論を啓示認識の原理としない時には、すぐに神性否定のキリスト論や半神・半人キリスト論や三神論」の陥穽に陥っていくことになるからである。

「ルター教会自身、宗教改革の時代の終わりにおいて、改革派教会と違ったふうに理解していたわけではなかった……。それであるから何も改革派教会と違ったことを告白しなければならないわけではなかった……」。このことは、「和協信条の〔二つの〕導入部が示している。そこでは聖書、『旧約および新約聖書の預言者および使徒の書物』が、『唯一の審判者、標準、規範』、『イスラエルの純粋な、清い泉』として認められており、『いわば唯一の試金石として、それによってすべての教理は、それが敬虔なものか、不虔なものか、真か偽かどうかについて検討され、判断されるべきものである』と述べられている」。したがって、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する「（中略）古今の教師による他の著作は、たとえそれらがどのような名声をもっていようと決して、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書と等しい權威を持つものと考えられるべきではなく、すべて聖書の下位におかれるべきである」。同様に、「公の信仰告白書のシュマルカルト信条」には、「ルター自身の言葉」で、「人は〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する全く人間的な〕聖なる教父たちの著作あるいは言葉から信仰箇条〔教会の＜客観的な＞信仰告白および教義（Credo）〕をつくるということはしてならない……。……あくまで神の言葉」が、すなわち「先ず第一義的に優位に立つ原理」・規準・標準としての「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身と共に、「教会に宣教を義務づけている」教会の宣教の思惟と語りにおける原理・規準・標準である聖書が、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の「信仰箇条〔教会の＜客観的な＞信仰告白および教義（Credo）〕を造るべきであって、信仰箇条はそのほか何人も、たとい御使いといえどもそれを造ってはならない」と述べられている。このような訳で、「ルター派は、改革派と同様に、カトリックの立場に対して、いささかの譲歩もなすことはできない……」。ここに、「福音主義的な決断がある」。

それに対して、「一五四六年四月八日、トリエント総会議の第四会期における〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する〕ローマ・カトリックの決断」は、次のようなものである——「ワレワレハ旧約と新約の諸書物ト同ジョウニ、キリストニヨッテ口授サレ、聖霊ガ書キ取ラセ、カトリック教会ノ中ニ受ケ継ガレ、保存サレテイル信仰ト道德ニ関スル＜伝承＞ヲ、同ジ敬虔ノ情ト尊敬ノ心ヲモッテ受ケ入レ、尊ブモノデアル……。それであるから聖書は確かに、われわれが啓示を知る認識

のひとつの源泉であるが〔「啓示の第一の認識源泉である」が〕、「しかし唯一の源泉ではない」、すなわち**第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会的な＜伝承＞の担い手および守り手のカトリック教会」**は、「啓示の第二の認識源泉として」、その**第三の形態の神の言葉である全く人間的なカトリック教会に対して**、起源的な第一の形態の神の言葉であるキリストにあっての特別「啓示の第一の認識源泉である〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である〕**聖書と同じ＜権威＞を帰さなければならない**」。この時、カトリック教会は、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である聖書（イエス・キリストによって直接的に唯一回的特別に召され任命された預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」）を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準・基準として、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、それに対する他律的服従とそのことに対する決断と態度という自律的服従との全体性において、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」（純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請）という連関・循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指すことを放棄したのである。日本の「カトリック教会とプロテスタント諸教会による新共同訳性聖書」も、「対立する双方に真理があるというような俗説が、世界史的に流布され、流通している中で」の党派的多元主義、党派の共生主義、外皮的形式的一致主義によるもので、真に、バルトの言うような「神への愛」と「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」という連関・循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指すということが主眼ではないものであるとすることができる。

「既に**イレナエウス**」は、「**まことの知識**」を、『〔第二の形態の神の言葉である〕**使徒タチノ教エト、全世界ニワタッテノ〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会ノ古イ体系**』として定義した。『**オリゲネス**』は、「**信ジラレルベキ真理**」を、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「**教会オヨビ使徒ノ伝承**〔「普遍的な、カトリック教会が……承認」した「使徒的伝承」〕として定義した。『**これらの定義において問題**』は、いずれもイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞の中での「**存在的なラチオ性**」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業（・働き・行為、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来

事、客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「**神の言葉の三形態**」（換言すれば、「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の**関係と構造**

（秩序性）に対する認識と承認と確認の欠如にある。第二の形態の神の言葉である「聖書の中にある使徒的な伝承だけでは不完全である」という考え方にある、「スベテヲ聖書カラ受ケトルコトガデキナイ」という考え方にある、「実際の生活にはなお多くのことが必要であって聖書は生きるために必要なことを言いつくしていない」から人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍を尊重すべきであるという考え方にある。

「**第二ニカイア会議**（七八七年）の時には、書き記サレテイル伝承オヨビ書き記サレテイナイ〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会ノ伝承を拒否するものたちはのろわれるべきであるというはっきりとした言明がなされるようになる」。「この〔**第二の形態の神の言葉である**〕聖書と並んで、力を奮い、聞かれるべき〔**第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の**〕使徒的伝承」は、「普遍的な、〔**第三の形態の神の言葉である全く人間的な**〕カトリック教会がそのようなものとして承認するところのもの」、すなわち**第三の形態の神の言葉である全く人間的なカトリック教会が承認する「使徒的な、その限り合法的な伝承（教会的な伝承）のことである**」。

この事態は、「すでに四世紀から五世紀への移行行きの中で生起している」——自然神学と＜非＞自然神学とを混在させたアウグスティヌスは、「福音をまだ信じていない人間に向かって何が語られるべきであるかという問いに直面して」、彼自身の体験の思想を介して、「ワタシトシテハ〔**第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復するという仕方ではなく、第三の形態の神の言葉である全く人間的な**〕カトリック教会ノ権威ニヨッテ動カサレルノデナイナラバ、福音ヲ信ジナイデアロウという言葉を書いた」。

この言葉は、**第二の形態の神の言葉である「聖書そのものを〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の〕伝承の中に編み入れることを意味している**」。

この「聖書を伝承に形式的に編み入れ、従属させた多くのもののうちの最初のものひとり」が、「〔啓示の〕真理ハ〔**第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の**〕伝承ヲ理解スル者ダケガ、〔**第二の形態の神の言葉である**〕聖書ノ中デ見出スコトガデキルという異端的な命題を引用したイレナエウスである」。

この**第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の伝承**に対して対置された「テルトゥリアヌスの真理」も、「宗教改革者たちの〔**第二の形態の神の言葉である**〕聖書ノ真理〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」〕というよりも、……歴史の中で、……〔**第三の形態の神の言葉である全く人間的な**〕教会に伝達された真理実体……であった」。

この「真理実体の結論的ナカヲ持ツモノハアトノモノデアル、アトノモノハ先立ツモノニマサルというわけで、結論的ナカヲ持ツモノ」は、歴史的に発展してきたところの現存する第

三の形態の神の言葉である全く人間的なカトリック教会の「カトリック体系（カトリック教会の伝承）」ということになる」。まさにこの思惟と語りは、「教会に宣教を義務づけている聖書が教会を支配するのであって、教会が聖書を支配してはならない」という聖書原理を破壊するものである。まさにこの思惟と語りは、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の側からする（人間の側からする）、それ自身が聖霊の業（・働き・行為）であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「神の言葉の三形態」（換言すれば、「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）の破壊である。「規則証明の父テルトゥリアヌス」は、「ワレラノ主キリストハゴ自分ヲ真理ト呼び給ウタ、シカシ習慣トハ呼び給ワナカッタ」と書いた。「アタナシウス」は、「(真理を宣べ伝えるのにそれ自身十分である)『聖にして靈感を受けた書物』とそれらに対する注釈として用いられるべき、そのほかの教えを含んだ書物の間に、明瞭な区別を立てた」。これらに依拠して「アウグスティヌス」は、「聖書ニ明ラカニ書カレテイルコトノ中ニ、信仰ト生き方ニ関スルスペテノコト、スナワチ希望ト愛ガ見出サレナケレバナラヌ」と説明した。しかし、一方で、自然神学と＜非＞自然神学とを混在させた「アウグスティヌス」は、「宗教改革的決断の意味での、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書と〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の〕伝承の明らかな、批判的な対置にまで到達することはできなかった」。

「カトリック的な、宗教改革および対抗改革にいたるまでの時代にとって……標準的な記述」は、「半ペラギウス主義者の立場と起源的には間接的にアウグスティヌス的な予定論および恩寵論に反対して、四三四年……レリヌムのヴィンツェンツによって書かれた『教育ノ手紙』に見出すことができる」——第三の形態の神の言葉である全く人間的なカトリック教会における「カトリックノ信仰ノ真理の認識へと通じる道」は、「第一ニ、神ノ律法ノ權威ニヨル道」であり、「第二ニハ、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕カトリック教会ノ伝承ニヨル道」である。後者の道は、「ワレワレガ、イタルトコロデ、イツモ、スペテノモノヨッテ信ジラレルコトヲ保持スルタメニ必要である」。すなわち、「普遍性〔「場所的——地理的にいたるところ教会の立場である」ところのそれ〕、年代性〔時間的に「先祖たちおよび父祖たちの立場であった」ところのそれ〕、意見の一致〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の「すべての担い手（司祭ト教師タチ）によって代表されている」それ〕が必要である」。それに対して、バルトは、次のように述べている——第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会の宣教をより危険なものにしてしまうのは、教会がその宣教において、正しい注釈を、先ず第一義的に優位に立つ原理〔・規準・標準〕としての〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリスト共に」、「教会の宣教における原理〔・規準・標準としての第二の形態の神の言葉である〕聖書に基づくことをしないところにある」、また「教会の宣教をより危険なものにしてしまう」のは、教会がその宣教において、「正しい注

釈を、最終的に……〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の〔全く人間的な〕教職の判決に、また間違ふことはありえないものとして振る舞う〔全く人間学的な〕歴史的——批判的学問の判決に、依存させてしまうところにある」。したがって、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会のすべての成員は、「教授でないものも、牧師でないものも、彼らの教授や牧師の神学が悪しき神学でなく、良き神あるということに対して、共同の責任を負っている」(『啓示・教会・神学』)。

「トリエント総会議も、……未決のままにしておいた〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の〕伝承原理」を、「ヴィンツェンツは、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の〕伝承は、その側として聖書の正当な解釈であるから〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の全く人間的な教職による、第二の形態の神の言葉である聖書の正当な解釈であるから〕、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の〕伝承の解釈および……〔そのような第二の形態の神の言葉である〕聖書の解釈は、一致した意見の中でその都度の〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の教職がなすべき事柄であるというように理論的な答えを与えた……」。したがって、**第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の「伝承の枠の中で遂行されるべき注釈から引き出されたカトリック的信仰ノ真理」**は、「一方においてⅠテモテ六・二〇によれば〔第二の形態の神の言葉であるテモテによれば〕、ユダネラレテイルコト」、すなわち「**アナタニ委託サレタモノ……公の伝承……アナタノトコロニ持ッテコラレタ事柄……ユダネラレタモノ……**」である、それ故に「アナタハ創始者ではなく」、「〔すなわち、アナタハ創始者ではないが、第三の形態の神の言葉である全く人間的な**教会の宣教**およびその一つの補助的機能としての神学の思惟と語りにおける**原理・規準・標準としての聖書との等価性**において〕**見張人デアリ、……弟子デアリ、……従者デアル**。それであるから」、「アナタハ」——すなわち、第三の形態の神の言葉である全く人間的な**教会の全く人間的な「司祭、教師、注釈家、博士」**は、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「**神の言葉の三形態**」(換言すれば、「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性)の**関係と構造(秩序性)**を主観的に恣意的独断的に止揚し越権して「その都度の現在のテモテ〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会のテモテ的人間〕として」、第三の形態の神の言葉である**教会の宣教**およびその一つの補助的機能としての神学の思惟と語りにおける**原理・規準・標準としての第二の形態の神の言葉である聖書(テモテ)との等価性**において、「**守り、見張ること、保持することへと……召されている**」という点にある。したがって、ヴィンツェンツは、「一方において注釈を必要としており、補充を必要としている〔第二の形態の神の言葉である〕聖書と、他方において注釈し、補充する〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕**教會的な伝承**との、＜曖昧な併存＞を、ひとつのまとまったユダネラレテイルモノノ統一体たらしめることによって、彼がこの統一体」を、自然的な有機体、「生物体……として理解し」、両者の「**保持と成長**を〔第三の形態の神の言葉で

ある全く人間的な] 教会の教職の手にゆだね、それと共に〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な] 教会の教職を〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な] 教會的な傳承の可視的な<主体とした>のである」、まさに自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階に停滞し循環することを説いたのである——第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教會的な傳承」を、「忠実ニ結び合ワセ、巧ミニ整エ、立派サト優雅サト美ヲ増シ加エ、前ニハモット曖昧ニ信ジラレテイタコトヲ、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な] 汝ガ説クコトニヨッテ、ヨリ明瞭ニ理解サレルヨウニセヨ。以前ノ時代ガ理解ヲ尊重シナカッタコトニ関シ、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な] 汝ヲ通シテ後ノ時代ガ理解ヲ喜ビ感謝スルヨウニセヨ」。終末論的限界の下でのその途上性において、他律的服従と自律的服従との全体性において、絶えず繰り返し、第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復して、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準として、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあつての神、キリストの福音を尋ね求める行程を経ないところの、そのような「教會的な進歩」・「宗教ノ進歩」・「〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な] 教會的な傳承の保持と成長」は、まさに第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教會的な傳承」の付加価値生産そのものである。「傳承は成長する……自然的な有機体が本質と種類という点では同一のものであり続けながら、しかも成長し、その限り自分自身と同一でありつつ絶えず新しくなるのと同様である」。そこでは、「人間の自己運動を神のそれと取り違えるという混淆」が、「神の自由を認識していないという事態」が惹起している、惹起し続けている（『ヘーゲル』）。

それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「神の言葉の三形態」（換言すれば、「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）の中での第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>〔区別を包括した同一性〕」として現存している「聖書」と第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会」（その「教會的な傳承」）、また起源的な第一の形態の神の言葉である「啓示」と第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会」（その「教會的な傳承」）との「同一視」を、すなわち第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会」（その「教會的な傳承」）と「啓示との同一視の圧縮された暗示的……表現」を、「人はトリエント会議そのものの中に見出すことができる」。「一五六四年に定式化されたトリエント会議ノ信仰ノ宣言における聖書翻訳および聖書説明についての構成要素によれば」、第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>〔区別を包括した同一性〕」として現存している「聖書を、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な] 聖ニシテ母ナル教会ガ昔カラ支持シ、今モ支持シテイル聖書ノ解釈ニ反シテ、自己流ニ解釈すること、マタ〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な] 教父タチノ一致シタ意見ニ反シテ解釈をすることが禁じられている」、換言すればこのことは、第二の形態の神の言葉である聖書が第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会を支配するので

はなく、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会が第二の形態の神の言葉である聖書を支配することの宣言である。この主張は、第二の形態の神の言葉である「聖書は確かに、われわれが啓示を知る認識のひとつの源泉である」が、すなわち「啓示の第一の認識源泉である」が、「しかし唯一の源泉ではない」のであり、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教會的な傳承の担い手および守り手のカトリック教会は、啓示の第二の認識源泉である」から、その「カトリック教会」に対して、「啓示の第一の認識源泉である聖書と同じく権威を帰さなければならない」というように、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教會的必要（欲求）から、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「神の言葉の三形態」（換言すれば、「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の關係と構造（秩序性）を止揚し越権してしまう事態を惹起させる。この「トリエント會議でまとまった形で表現されたカトリック的命題」は、十六世紀において、またそれ以来現在に至るまで、主要な点において、次のように「主張され、弁護されてきた」。それは、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明の能力」の＜総体的構造＞の中での「存在的なラチオ性」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の關係と構造（秩序性）について明確に提起することなく、それ故に主観的に恣意的独断的になされたところの、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である「キリストご自身は確かに語り給うたが、しかし書くことはされなかったし、特に書くようにとの委任を与え給わなかった、〔そのイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である〕聖書はまたそうでなくてもその口頭の傳承をもった〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会よりも若いものであるし、ただ単にもっと若いというだけでなく、聖書はまさに教会に基礎づけられているし、最も古い教会が造り出した技であり、それが正典として認められている点で教会の決断に依存している〔すなわち、教会が聖書を支配するのであって、教会に宣教を義務づけている聖書が教会を支配するのではない〕」という主張であり弁護である、また「古代教会における聖書の教義的な不十分さについての命題の繰り返しを見よ」という主張であり弁護である。このようなわけで、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「カトリック教会」は、主観的に恣意的独断的にその一面だけを拡大鏡にかけて固定化し全体化し絶対化して、あくまでも「カトリック主義の立場から」、その第三の形態の神の言葉である全く人間的な教會的必要（欲求）から、第三の形態の神の言葉である教会の宣教およびそのひとつの補助的機能としての神学の思惟と語りにおける原理・規準・標準としての第二の形態の神の言葉である「聖書の権威と自由」以外の第三の形態の神の言葉である全く人間的な

「教会の第二の權威を強調した」のである。ここにおいては、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会を支配し給う神の支配と、その支配の中での人間的奉仕に対する認識」が欠如しているのである。第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会を支配し給う神の支配」——すなわち、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学の思惟と語りにおける「先ず第一義的に優位に立つ原理」・規準・基準としての「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストと共に、「教会に宣教を義務づけている」教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学の思惟と語りにおける原理・規準・標準としてのその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である「聖書の自由な支配」と、「その支配の中での〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の〕人間的奉仕に対する認識」が欠如しているのである。

「当然のことながら〔第二の形態の神の言葉である〕聖書よりももっと古い伝承、聖書そのものさえもそれに基づいている伝承」は、「啓示そのもの〔起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身〕からその文書的な証言へと通じる道である〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である聖書、預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」へと通じる道である〕」。その道は、「イエス・キリストご自身との直接的な出会いを通してぬきんでた〔イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された第二の形態の神の言葉である〕預言者と使徒たちの道である」。またその道は、第二の形態の神の言葉である「預言者および使徒たちの証言が文書〔聖書〕となってまとまって来ると共に、それ以後の〔その聖書を媒介・反復する、その聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とする第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会に対しては閉じられ〔何故ならば、第二の形態の神の言葉である聖書とその聖書を媒介・反復するところで成立する第三の形態の神の言葉である教会は、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における連続性と断続性との構造としてある＜段階＞的差異性において存在しているからである〕」、「その文書性の中でこの証言と共に、証言の担い手であり宣教者である限りにおいて〔その聖書的啓示証言を媒介・反復する限りにおいて、すなわちその聖書的啓示証言を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とする限りにおいて〕」、それ故に「そういう仕方で啓示の担い手である限りにおいて、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕後代の教会の道は始まって来る」し、「始まって来た」。その時、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「後代の教会の道における証言」は、第二の形態の神の言葉である「預言者および使徒たちの証言とは違っているものであり」、すなわち「預言者および使徒たちがさらに生き続けるという意味における証言ではないのであり」、それ故に「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存して

いる「預言者および使徒たちの証言におけるような直接的な啓示の継続としての証言ではないのである」。第三の形態の神の言葉である全く人間的な後代の教会の道は、あくまでも聖書を媒介・反復した、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会における証言である。第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会が、あの証言を生み出したのではなく〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会が、第二の形態の神の言葉である聖書的啓示証言、イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」を生み出したのではなく〕、「むしろあの証言が〔〔第二の形態の神の言葉である聖書的啓示証言、イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」が〕、〔第三の形態の神の言葉である〕教会を生み出したのである」。第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会が、あの証言は神の言葉として正典であることを認識し承認したのであるが、結局その正典性はあくまでそれ自身の中に、換言すれば教会に対し証しされた啓示の中に、イエス・キリストの出現の中に〔何故ならば、そのイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その啓示自身がその「啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞を持っているのであるから、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動を持っているのであるから、客観的な「存在的な必然性」と主観的な「認識的な必然性」を前提条件とした主観的な「認識的なラチオ性」を包括した客観的な「存在的なラチオ性」を持っているのであるから〕、第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している「預言者と使徒たちの任命の中に基礎づけられているのであって」、「決してこの事実を後から承認する〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の判断の中に基礎づけられているわけではない」。

そのような訳で、第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している「聖書と並んでまた同じ意味で権威として聞かれるべき普遍的な〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の〕伝承が存在するということ」、また第三の形態の神の言葉である「教会自身と〔起源的な第一の形態の神の言葉としての〕啓示を等価とする等置」は、「たとえイレナエウスやアウグスティヌスの口から出た言葉だとしても、虚偽であり誤謬であったのである」。そのような「カトリック主義」におけるような、また「新プロテスタント主義」も同じであるが、両者におけるような「不遜にも偽りの客観性……に基礎づけられている主観主義よりももっと危険な主観主義はあり得ないのである」。何故ならば、両者においては、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の

実在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「**神の言葉の三形態**」（換言すれば、「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な類と歴史性」）の**関係と構造（秩序性）**におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の実在」としての第二の形態の神の言葉である「**ただ聖書の中でだけ、神の言葉を聞かねばならないということに対して忠実さ**〔他律的服従と自律的服従との全体性としてのそれ〕が足りなくなる」からである、忠実さが欠如するからである。また、その時には、第二の形態の神の言葉である「**聖書の中でご自身を証しされたところのキリスト**〔客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」、客観的な「存在的な必然性」〕**および聖霊のほかに**〔その「啓示の出来事」の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」、主観的な「認識的な必然性」のほかに〕、「さらになお直接的に認識され得るキリスト、直接的に受けとることができ、直接的に働く聖霊を自分のものとして主張することが許されると信じるところのキリスト、あるいは聖霊」（人間の自由な内面の無限性、人間的理性や人間的欲求やによって主観的に恣意的独断的に対象化され客体化された「存在者レベル」での神、キリスト、聖霊）を生起させ、「あらゆる種類のそのほかのより世俗的な名前を帯びることができる」からである、その時には、「**聖書の中でご自身を証しされたところのキリストおよび聖霊**」は、「**自分自身の理性、あるいは自分自身の生活感情、あるいは自然、あるいは歴史意識と同一であることができる**」からである。その時、「よしんば彼らがキリストと聖霊を引き合いに出し、彼らのうちのどれほど多くが、互いの間の最もすばらしい意見の一致を喜ぶとしても、この道の上では彼らはただいたずらに分裂を増し加え、いやすことができないものとすることができるだけである」。

「古プロテスタント主義の領域においても、伝統主義」が、すなわち「啓示への直接的な接近を熱狂主義的に信じる信仰が、……力を奮うようになった」。その時、「**先ずその者たちのまいた種子から、ローマ側の論争家たちによって……軽蔑されたプロテスタント的な分派が発生したのであるが**」、その「**十六世紀の熱狂主義者、心霊主義者、神秘主義者たち……のことを考えてみなければならない**」。それと同時に、「公に福音主義的立場をとった告白教会のこと」——すなわち、その告白教会は、「**聖書原理を真剣に受けとらずあまりに僅かしか受け取っていなかった**」から、**第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に、キリストにあつての特別「啓示の第一の認識源泉である〔第二の形態の神の言葉である〕聖書に対する第二の啓示源泉という性格を持たせ**」、「**聖書原理を〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会の……所有として前提した告白教会のこと**」も考えてみなければならない。その時、告白教会においても、第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している「**聖書の権威と自由を剥奪し**」、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「**教会が〔第二の形態の神の言葉である〕聖書を支配することになった**」のである。キリストにあつての特別「啓示の第一の認識源泉である〔第二の形態の神の言葉である「啓示

との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕として現存している〕聖書」に対して、「啓示の第二の認識源泉として魔術的に変容させられた、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会に属する全く人間的な〕ルターの名、カルヴァンの名のことを考えてみよ」、また全く世俗的な支配としての「皇帝および国会の前でなされたアウグスブルクの信仰告白がルター教会にとって持つようになったほとんど魔術的な権威のことを考えてみよ」。このように、「古プロテスタント主義自体が、十七世紀において、……実際的にばかりでなくまた原理的にも、聖書原理という宗教改革的決断と矛盾するところの、トリエント総会議の伝承原理、カトリックの伝承原理を内在させていたことを露呈させたのである」。そして、「新プロテスタント主義」は、この内在的な「弱点」と欠陥を受け継いだのである。それらは、「ちょうどトリエント総会議が使徒的であると主張した〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の〕伝承がそうであったように、〔第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している〕聖書とは何ら関係のない」ところの、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の宣教における規準であった。それらは、「事実上、教会の自己疎外の増大以外のなにものにも役立ちはしなかった」し、キリストにあっての「神についての教会の語りの墮落と荒廃以外の何ものにも役立ちはしなかった」。

「アルミニウス主義者のオランダの法律家兼歴史家のH・グロティウス」は、「スベテノ言葉ハ〔第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している〕聖書ト〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の〕伝承トイウフタリノ証人ノ中ニ立ッテイル、ソシテ聖書ト伝承ハ互イニ〔明ラカニ〕照ラシ合ウということを原則的に承認し」、「(スコラ哲学者によってゆがめられた、昔ノ教会ノ古クカラノ、普遍的ナ意見ノ一致)を欲した」。「啓示の第一の認識源泉である〔第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している〕聖書」と「啓示の第二の認識源泉である〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕昔ノ教会とを等置して」、「昔ノ教会の出自の中にその源泉を見ようとする時」、その第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会は、第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している「聖書に対してもその上に立つ裁判官〔原理・規準・標準〕として、自分を立てたことになる」。このように、「聖書と最も古い伝承を歴史的にいっしょに見ようとする彼の見方は、伝承の概念を、現在にまで広げているトリエントの教義と同様必然的に、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕現在の教会が自由に処理することができる啓示所有〔啓示支配〕の考え方であって」、すなわち「聖書は先ず第一義的に優位に立つ原理」・規準・標準としてのイエス・キリストと共に、教会の宣教における原理・規準・標準であるという聖書原理を、「聖書の権威と自由を否定する考え方であって」、「宗教改革的な決断を除去してしまう考え……へと移って行かざるを得なかった……」。

「ルター派のドイツにおいてグロティウスに相当する者は、……ヘルムシュタットのG・カリクストゥスである」。カリクストゥスは、「信仰のみによる義認についての教説を……高く評価し、……自分はよきルター派信者であると考えることができた福音主義的神学者……のひとりであった」。しかし、ヨハネ8・1以下のイエスの人間の内面の普遍性に届く言葉を理解しなかったに違いないカリクストゥスは、キリストにあつての神の「恵みが人間の側によって補充される必要があるという教説を付け加えることが必要である〔例えば、神だけでなくわれわれ人間も、われわれ人間の自主性・自己主張・自己義認の欲求もという、人間の神との共働・協働・共労が、「神人協力説」が必要である〕と考え」、「宗教改革者たちにとって疎遠な、〔余りに人間的な〕道徳的な関心と情熱の独立性を主張した」。このカリクストゥスは、「五ツノ世紀ニワタル意見ノ一致……すなわち、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会の〕最初の五世紀の教師たち、信仰告白、会議の決定が互いの間で一致する本質的な一致、（それからまたそれ自身この起源的な伝承の集合体の一つの構成要素として理解されなければならない）聖書との間の本質的な一致……が存在する」から、その時代において教会——第三の形態の神の言葉である全く人間的な「原教会」は、「自分にとって欠かすことのできない教えの内容を神の言葉から受け取ったのであり〔換言すれば、終末論的限界の下でのその途上性において絶えず繰り返し、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準として、他律的服従と自律的服従との全体性において、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方、で、純粋な教えとしてのキリストにあつての神、キリストの福音を尋ね求めるという行程を経ることなく、直接的無媒介的に神の言葉から受け取ったのであり〕」、それ故に第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会がそれを実際に受け取ったことによって、また自分でも与え、自分で自分のものとした……」と主張した。したがって、第三の形態の神の言葉である全く人間的な教会は、「神の言葉を聖書から受け取り取る」と同時に、「聖書の権威と自由に支配されることなく」、「神の言葉を自分で自分に与え……自ら自分のものとした」とカリクストゥスは考えた。言い換えれば、**カリクストゥスは、第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している「聖書の権威と自由を剥奪し」、第三の形態の神の言葉である全く人間的な「教会〔聖職者、牧師、神学者〕が聖書を支配する道を考えて」のである。まさに、ここにおいては、「聖書に関する宗教改革的な認識に対して、決定的な、公然たる後退がなされている」。**この時、「歴史的な立場から原教会」は、「自分自身を〔第二の形態の神の言葉である「啓示との＜間接的同一性＞〔区別を包括した同一性〕」として現存している〕聖書の下に置いたのではなく、すなわち聖書を通して啓示について教えられるという立場に自分を置いたのではなく」、「むしろ〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会が神の言葉を聖書から受け取ると同様、自分で自分に与えることによって」、「聖書と並列的な立場」に、「規範性〔原理・規準・標準〕の立場」に、「自主独立的な、教会的な啓示所有〔啓示支配〕の立場」に、「教皇の立場」

に、「教会そのものの無謬性の立場」に、生来的な自然的な人間が「先験的ニ啓示について知っている立場」に、「自分の身を置いたのである」。このカリクストゥスの主張は、「信仰だけでなく業を必要とする」という、すなわち「恵みは人間の側によって補充される必要がある」という、「義認論を根拠としている」。また、このカリクストゥスの主張は、「彼における理性〔人間〕と啓示〔神〕の関係における調停的な認識方法〔直接的無媒介的な認識方法〕に根をもっている」——「人間の精神活動全体の領域の中には、啓示を受け入れる場所、啓示を把握しなければならない結びつき点〔結合点〕、……啓示が真理であるという意識が強固になる特徴的な目じるしが存在する」、すなわち「二重の知的な受容（理性と啓示）が神の配剤によって併存する」。このように、**カリクストゥスは、「内在的必然性を持って、カトリックの伝承原理に平行する新プロテスタント主義の堅固な形を形成した」**。因みに、「人間には啓示なくしても」、「人間自身が〔人間に内在する神的本質を〕本来持っていて、そして啓示の中で言わば甦って来る」、人間に内在する「啓示能力」・「言語能力」・「言語受容能力」・「呼びかけられうる能力」がある、それは、人間が持っている「形式的な神の像」である、それは、「啓示の中で初めて甦って来るところのものであるとしても、啓示に先立つ『啓示能力』・「結合点」である、それは具体的には、人間の「人間性」・「理性や応答責任性や決断能力」のことであり、「神の啓示に対する客観的可能性となるものである」とブルンナーも主張している（『ナイン！——エーミル・ブルンナーに対する答え』）。彼らは、まさに、カトリック主義と同じように、自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階で停滞と循環を繰り返す道を目指しているのである。